

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	坂井 利彰
論文審査担当者	主 査	政策メディア研究科委員 兼環境情報学部 教授	佐々木三男
	副 査	政策メディア研究科委員 兼環境情報学部 教授(シニア有期)	熊坂賢次
		政策メディア研究科委員 兼総合政策学部 教授	村林裕
		政策メディア研究科委員 兼環境情報学部 准教授	加藤貴昭
学力確認担当者：			

坂井利彰君から提出された博士論文の題目は「世界における男子プロテニス界の構造と日本人選手の強化策」である。本論文の目的は、世界ランキング 100 位にランクインする日本人のプロテニス選手を継続的に輩出するための強化策を構築することにある。そこで、特に日本国内で育成が可能な“晩成”の選手に着目し、男子プロテニスツアーのデータベースを基にした計量分析、選手および関係者への半構造化インタビュー手法を用いて、世界ランキング 100 位への到達とランキング維持のための戦略について検討を行った。

(論文審査の要旨)

第一に、男子プロテニスツアーの構造的な特性を明らかにした。100 位へのランクイン経験があるトップテニスプレイヤー411 名を対象に、100 位にランクインした年齢に基づいて、ランキング 100 位到達年齢とその後のランキング推移の関係性を明らかにした。特に 100 位到達年齢が 20 歳以下の選手については最高ランキング到達後もランキング降下が見られることは極めて少ない。一方、100 位到達時年齢が 21 歳以降の選手はランキングを維持することが困難であり、ピーク後のランキング降下が顕著であった。すなわち 100 位到達時年齢が 20 歳であった場合のランキング推移と 21 歳であった場合のランキング推移には明確な差異が認められた。得られた結果に基づき 100 位到達時年齢が 20 歳以下の選手を「早熟型」、21 歳以上の選手を「晩成型」と分類した。その後、ランキング、試合内容、出場大会などの項目に関して、早熟型と晩成型の比較分析を行った。その結果、早熟型は晩成型よりも生涯の最高ランキングが極めて高く、その要因として男子プロテニスツアーのポイント制度の構造が早熟型に有利に働いていることを明らかにした。このようなランキング構造の存在に関して、目標ランキングへの到達を目指すためには年齢に応じて段階的に上位ランキングへの到達目標を設定させることの重要性について議論している。そこで、773 名の選手の年齢に応じたランキング推移に基づき、各年齢時のランキングに応じた目標ランキングへの到達率を網羅的に求め、ランキング推移表を作成した。その結果、早熟型と分類されなかった場合の 30 位到達割合が極めて小さく、特にアジアの晩成型選手においては 30 位に到達した選手が見当たらないことが明らかになった。

第二に、東アジアの個別の選手について、ケーススタディを行った。まず早熟型の選手である錦織圭選手のランキング推移や育成環境を取り上げ、早熟型は溢れる才能により環境と資金を呼び込むことが可能であり、加えて男子プロテニスツアーの構造そのものが早熟型に有利に働くトライアングルの好循環にある。一方で、晩成型は才能がさほどではないがゆえに、そのトライアングルの好循環を作れず、地道に大会の選択をしてポイントを重ねなくてはならない。その結果、早熟型の晩成型に対する優位性は絶対的であることを考察した。次いで、東アジアの晩成型 4 選手を取り上げ、早熟型の絶対的な優位性を踏まえたときに、男子プロテニスツアーのスケジューリングにおいていかなる戦略をとるべきかを検討した。多くが 50～100 位に位置している晩成型選手の場合、対戦相手のレベルが高く獲得ポイントが多いグランプリ大会に出場するか、レベルが低く獲得ポイントも少ないチャレンジャー大会に出場するかを選択に迫られる。そして、東アジアの晩成型 4 選手に関して言及すれば、ポイントを獲得しているのはチャレンジャー大会であり、グランプリ大会への出場数を増やすことはランキングを落とすきっかけとなっていることが明らかになった。チャレンジャー大会に集中して出場すれば、安定的にポイントを獲得し、ランキング 50 位へのランクインが現実的となる。このチャレンジャー大会重視の選択は、早熟型の絶対的な優位性を認め、早熟型のランキングである 30 位にランクインすることを、「諦める」戦略であると示唆される。

最後に、男子プロテニスツアーの構造と、東アジアの選手のケーススタディを踏まえ、さらに補足的な計量分析を加えることで、日本人晩成型選手の強化策を提案した。すなわち選手が個人としてとるべき戦略と、日本のテニス関係者全体が“チーム日本”として取り組むべき課題に分けられる。

まず、日本人晩成型選手は、アジアのハードコートのチャレンジャー大会に集中して出場すること

論文審査の要旨及び担当者

No.2

が最も効率的なポイント獲得法となる。身体的に小柄であり、地理的に欧州から離れた日本人晩成型というあらゆる意味で不利な立場にある選手にとって、負担が大きくレベルも高い欧州のグランプリ大会に出場することは、ランキングの降下につながるリスクにつながる。アジアのハードコートのチャレンジャー大会に集中して出場し、ランキングを落とさない範囲においてのみグランプリ大会に出場すべきと示唆される。

次に、日本の晩成型選手はランキング推移表に基づいて19歳、22歳、25歳という区切りにおいて、ランキングの短期目標を設定すべきと示唆される。長期目標を100位へのランクインとする場合、19歳までに500位にランクイン(100位到達割合59%)し、22歳までに300位にランクイン(同53%)することが必要となり、25歳までに100位に到達できないとその後の到達割合は25%以下と確率が下がることが明確となっている。この短期目標を達成できる場合のみにおいて、ポイント獲得のための大会選択から実力向上のための大会選択に切り替える戦略をとれば、ランキングと実力双方の安定した向上が期待できると示唆される。

最後に、“チーム日本”として日本のテニス関係者が取り組むべき課題として、各国の育成モデルの採用、ナショナルトレーニングセンター(NTC)の機能強化、国際大会の自国開催の三点を提案した。各国の育成モデルでは、特にアメリカの大学における育成システムを例にとり、ジュニア期とプロ選手との間に大学を据えることでプロとして転戦するための身体・精神面での準備を行い、セカンドキャリアまで見据えることの重要性を述べた。NTCの機能強化では、日本にはトップランキングを経験した指導者が不在であることから、世界のトップを経験した欧米の選手(指導者)をNTCの強化責任者として招聘することで、NTCが世界のテニスと日本とのハブ機能を担うことが可能となる。国際大会の自国開催については、テニスの中心地である欧州と距離的に離れた日本は、選手の負担を軽減し大きなチャンスとなる自国でのチャレンジャー大会の開催を増やすことが日本人選手のポイント獲得に寄与すると思われる。同時に近年開催数を急激に増やしている中国などのアジア諸国として欧州に対抗できる環境整備を行う必要があることが示唆される。これらは一貫して、日本人選手にとって負担の少ない日本を本拠地とすることの重要性と、その上で海外、特にテニスの中心地である欧州からの情報を入手し“世界のテニス”とのつながりを保ち続けるべきであることを主張している。

以下に本論文の内容を章ごとに要約する。

第1章では、研究の背景、目的、既存研究との関連を説明した。

第2章では、男子プロテニスツアーの構造について検証した。まず、計量分析の元となるデータの取得先、内容について説明し、100位にランクインした年齢に基づき選手を「早熟型」と「晩成型」に分類した。さらに早熟型と晩成型の比較分析を行い、早熟型に有利な構造を明らかにした上で、構造を踏まえた「ランキング推移表」を作成した。

第3章では、東アジアの選手のケーススタディを行った。まず、早熟型である錦織圭選手のランキング推移と育成環境について説明した。早熟型と比較したときの晩成型の限界と、可能性について述べた上で、東アジアの晩成型4選手のケーススタディを行い、ケーススタディから得られたことについてまとめた。

第4章では、日本人晩成型選手の強化策をまとめた。日本人晩成型の大会選択における戦略について検討し、日本人晩成型が設定すべき長期目標と短期目標について述べた。そして、日本の指導者、関係者が、強化のために取り組むべき課題について述べた。

第5章では、結論と展望について述べた。

(新規性)

世界男子プロテニスツアーのランキング制度がもつ構造を明らかにし、その構造に基づく形で日本人晩成型選手の強化策を策定したことが本研究の新規性である。従来のテニスの戦略に関する研究は、ほとんどが技術的に「対戦相手に勝つ」ことを目的としたものである。本稿では「ATPポイントを獲得する」という目的を設定し、戦略的な出場大会の選択によって目標ランキングに到達する方法を検討した点に新規性がある。また、トップジュニア選手がプロツアーに移行する際のランキング推移についての研究はいくつかあるが、773名の選手を対象とするという規模で男子プロテニスツアーのランキング推移を網羅的にランキング推移表として作成し、選手のキャリアを検討できるよう

論文審査の要旨及び担当者

No.3

な研究は行われていない。さらに既存研究は「早熟型」の育成に関する研究であり、本稿が日本国内で育成可能な「晩成型」の強化に着目したところにも新規性がある。

さらに、選手や関係者へのインタビューを通して、レベルの高い欧州の大会やグランプリ大会への出場が重視されていることが明らかになったが、実際はそれらの大会に出場することはランキングを下げる要因になる一方で、実力向上にはつながっていないという新たな知見を提供した。

(成果)

- (1) 男子プロテニスツアーの構造を明らかにした。構造とは、100位にランクインした年齢が低いほど、生涯最高ランキングが高くなるという、「早熟型」に有利なシステムである。「早熟型」の選手は「晩成型」の選手よりも10代の時期に機会や環境において恵まれており、グランプリ大会を主戦場とすることで実力とランキングの双方を効率的に上昇させる。「晩成型」の選手はグランプリ大会を主戦場とできるまでにランキングを上昇させられないため、少ないポイントを地道に積み重ねるしかなく、早熟型との差を最後まで埋められない。
- (2) 選手のランキング推移の過程を網羅的に示した「ランキング推移表」を作成した。選手の長期目標を達成するための短期目標の設定に役立つとともに、現在の年齢とランキングに基づいて、セカンドキャリアも含めた選手キャリアの構築を支援する。
- (3) 日本人晩成型選手の強化策として、アジアのハードコートのチャレンジャー大会に集中して出場することが、ランキングを向上・維持するために最も効率的な方法であることを明らかにした。
- (4) 日本人晩成型選手の特性を明らかにすることで、日本のテニス界として取り組むべき強化の方針を明確にした。選手にとって負担が少ない日本のNTCや大学を拠点とすると同時に、それらが世界とのハブ機能を担うことの重要性を論じた。

本研究は坂井利彰君の高度な研究遂行能力と、当該分野における豊富な学識、そして政策・メディア研究に相応しい新規性の高さ、異なる学術領域の融合実現の成果を存分に示すものである。よって、本学位審査委員会は、坂井利彰君が博士(政策・メディア)の学位を受ける資格があるものここに認める。